大正後期から昭和初期にかけての住宅 競技設計における実用庭園について

西 村 公 宏*

As to “Garden for Practical Use” During The Latter Half
of Taisio Period to The Former Half of Showa Period

Kimihiko NISHIMURA

摘要：大正後期から昭和初期にかけての、中流階級を対象とした郊外住宅の競技設計に提出された住宅平面図には、庭園が描かれてあるものがあり、その庭園は実用本位の庭園であった。この傾向はほぼ一貫しており、その根拠としては、当初、生活改善運動の一環として注目された実用庭園が、不況から戦時下へと進む当時の日本の状況を許容するものであったことがあげられるであろう。

1. はじめに

大正後期から昭和初期にかけては、中流階級の出現、ならびに都市集中による住宅問題等により、郊外住宅の需要が顕在化し、この需要は都市における災害や鉄道会社等による沿線の宅地開発により促進された。

この流れは生活改善運動の発展と軌を同じくしており、生活改善のモデルを示すために、主に中流階級を対象とした郊外住宅の競技設計がこの時期、数多く行われた。

これらの競技設計に応募した建築家が提出した住宅平面図には、庭園が描かれているものがあり、しかも、その庭園は、従来の観賞本位の庭園とは異なり機能に重点を置くもので、「菜園」等の記載がなされた実用本位の庭園であった。

当時の建築家にとって中流階級の設計は、設計料が安くトラブルの多い、魅力に乏しいものであり、ましてや庭園の設計は、造園業者でも等閑視していた¹⁾²⁾ようであるが、郊外住宅の要望は社会問題化した都市環境の悪化に基づいており、その要望において快適な屋外環境は不可欠のものであったと考えられる。したがって、応募図面に描かれた庭園は、その時代の一般的な住宅庭園の概要を知る上では有効であると言える。

大正後期から昭和初期にかけての住宅に関してはすでに優れた研究³⁾が見られるが、本研究においては、特に庭園に着目し、当時流行したと言われる実用庭園の概要を把握し、その意義を考察するものとする。

2. 大正後期から昭和初期にかけての住宅競技設計における実用庭園の定義について

わが国における、第二次世界大戦までの住宅競技設計は54-66例ぐらいと言われているが⁴⁾、平面図に庭園が散見されるようになったのは大正後期からである。和風と洋風の二重生活の克服に重点を置いた「生活改善同盟会」が誕生したのは大正9(1920)年であるが、この組織の中の住宅改善委員会は、同年に6つの調査方針を決め、その内の一つに「4. 庭園は在来の観賞本位に偏せず保健防災等の実用に重きを置く可し。⁵⁾」という項目を盛り、委員の一人である田村剛が担当した。そして、田村による実用庭園の定義をまとめると以下になる⁶⁾。

(1) 庭園の職能

①庭園は住宅の敷地から家屋の面積を除いた一切の地積を指すもので、その所有に階級は関係ない。

②従来の庭園は観賞に重点が置かれたが、庭園には採光、通風、防火、排水、都市の人口密度の緩和、都市の空気の浄化等の機能がある。

③実用上、庭園は住宅の一部としての戸外室と言え、その利用は家族本位でなければならない。

④庭園は経済的な利用も大切で、蔬菜、花卉、果樹の栽培、家畜の飼養等実利的利用も大切である。

⑤前庭は塀を撤廃し、街路の装飾に役立つようにする。

(2) 庭園の広さ

建坪の3倍、庭園の職能を総て満たすためには5、6倍は必要で、特に市街地においては2階建てにしたり、

*千葉大学園芸学部

母屋以外の建物を整備するなど庭園の地積を増やす必要がある。

(3) 芝生と植込

芝生は居間や食事室に面した南向きの場所を選び、植込は松その他眺める一方のものではなく、夏に樹陰をつくり冬は日照を確保できる落葉樹がよく、余裕があれば噴水、花壇等を設ける。

(4) 勝手廻と菜園

勝手廻はきちんと整理し、菜園や花畑は勝手廻に近い方がよいが、宅地が広い場合には独立させてもよい。

(5) 運動場

砂場等は、子供室に近く主婦の目のとどく所で、芝生に次いで日当りの良い場所が良く、西や南に緑陰樹を植えると北風を防げる。

(6) 庭園建築と庭園家具

園亭や腰掛け等実用向きのものが良い。

(7) 通路

レンガや砂利等を使って庭園を一巡できるものが良く、路幅は4尺以下にする。

(8) 地 割

芝生、花畑等は南の日当りの良い位置に、勝手廻は北か西寄りの街路から離れた位置にとり、菜園は半日以上の日射さえあればどんな位置でも良い。

(9) 設計と管理

設計も管理も家族の手によってなされるべきである。

当時、洋風の小住宅が流行していたので、庭園も洋風のもものが好まれたのは当然と考えられる。したがって、単に菜園等が記載された洋風の庭園をそのまま実用庭園と見なすにはやや問題がある。そこで、本研究においては上記9項目を考慮して、実用庭園の構成要素を家屋の間取りとの関係において捉え、以下のように定義し、これを満たしている場合は設計者が実用庭園を意識して設計したと見なすことにする。

芝 生：家族室（居間、食堂等）とテラス（縁側）と南面にある芝生が連続している。

花 壇：芝生に準ずる日当りの良いところにある

菜 園：台所に近いところにある⁷⁾。

遊び場：子供室に近いところにある。

表-1は、大正後期から昭和初期にかけての住宅競技設計の内、庭園が住宅の平面図（配置図）に記載されている主な住宅競技設計をまとめたものである。競技設計名の欄の（Ⅰ／Ⅱ）は、Ⅱ：各競技設計の平面図の内、入選もしくは特に優れている等の理由で、雑誌もしくは図面集に掲載された図面の総数、Ⅰ：Ⅱの内で実用主義の庭園の性格が明確に出ていると思われる図面、即ち、花壇（花畑の性格が強いので実用庭園の一要素とした）、蔬菜園、（子供の）遊び場（主として砂場等を指す）、の

いずれかの記載のある図面の総数、を表している。なお、芝生も実用庭園の構成要素としているが、芝生のある庭園は明治時代から一般的だったので、芝生のみ記載のある庭園はⅠに含んでいない。また、本研究においては、実用庭園の概要を知ることが目的としているので、住宅競技設計における図面も主なものに絞っている。したがって、Ⅱは実用庭園の普及率を示すものではない。

構成要素については、上記の定義を満たしているものを○、満たしていないものを△とし、方位に関しては図面の中心を基準にN、NE、NW、S、SE、SW、E、W、に分類した。（方位不明の場合は空欄になっている）備考欄は、A：鶏舎がある場合、B：果樹園がある場合、C：庭園に樹木名の記載がある場合、D：設計者による庭園のコメントがある場合、E：庭園の中に伝統的な日本庭園風の部分がある場合、を表している。なお、建坪（1F）は30坪前後、敷地における家屋の位置は、南面を開けるか、家屋が中心に来る場合が一般的だったので、各図面における位置関係は省略した。また、各競技設計の応募規定もしくは選考基準は、ほぼ一定しており、採光、通風、家族の健康を重視し、配置図や配景図を求めているものが多い。庭園に関する規定は、建設費にも「庭園費は含まず」とあるように、平和記念東京博覧会（これも庭園の付置は単なる希望にとどまっている）を除いてはない。

3. 大正後期から昭和初期にかけての住宅競技設計における実用庭園の特徴について

まず、全体的傾向としては、以下の点が指摘できであろう。

(1) 敷地の広さと実用庭園の構成について

敷地の広さは本来、庭園の構成に重要な影響を及ぼすが、この時代の住宅競技設計においては明確な影響は見られなかった。例えば、全般的には当時の住宅競技設計が卓上のモデルプランでかつ対象地が郊外である性格上、100坪～200坪といった余裕のある敷地が多い中で、朝日住宅は実物即売といった条件から敷地坪数が50坪前後であるにもかかわらず、実用庭園の構成要素にそれほど大

表-2 実用庭園の構成要素の方位

方 位	芝 生		花 壇		菜 園		遊び場	
	○	△	○	△	○	△	○	△
N	1	3	1	1	5	2		
NE		2		5	31	5	2	1
NW			1	2	4	4		
S	72		40		1	5	11	13
SE	14		22	1	5	20	20	25
SW	7	1	17		9	13	15	16
E	2	4	10	5	11	8	1	4
W	1	2	1	1	4	2		3

表-1 大正後期から昭和初期にかけての主な住宅競技設計

[illegible]

きな変化が見られない点があげられる。

(2) 実用庭園の構成要素の方位について

方位について簡単にまとめたのが表－2であるが、芝生、花壇は、ともに○は南面（S, SE, SW）に多く、△は北面、東面（N, NE, E）に多い。菜園は、△は比較的南面に多いのに対し、○は南面と北面（N, NE）に両極化しているが、これは当時の台所が主に北に面していたことによるであろう。遊び場は、○、△ともに南面が多く、子供重視の傾向⁸⁾がうかがえる。

以上、全般的に南面重視と言え、採光を重視した家族本位の構成と言えよう。

(3) その他

実用庭園が中流階級に受け入れられた理由としては、都市生活の反動としての郊外生活へのあこがれ、物珍しさ、施工費が安い等があるが、当時の中流階級の家族構成（親・二人、子供・二人、女中もしくは老人・一人）にも原因があったと考えられる。田村剛も子供が大きくなるまでは庭を実用本位に設計するが「年をとってひまな時間をもち在宅がちにでもなったら、その時に又庭を造りかえて、恐らくは物静かな、眺めて美しい鑑賞本位のものにいたすでしょう⁹⁾」と述べている。

つぎに、時代を三つに区分し（昭和時代は日華事変の勃発した昭和12年で区切る）、世相をまじえながら実用庭園について考察していくことにする。

(1) 第1期：大正元（1912）年—大正15（1926）年

この時代は、実用庭園の濫觴期であるが、以下の4点がこの時代を特徴づけているであろう。

①第一次世界大戦（大正3年）：この大戦により日本経済は潤い、建築、造園の工事が増大したと言われているが、敗戦では戦時下の緊縮財政に沿った実用的な庭園が発達した¹⁰⁾。

②都市計画法・市街地建築物法（大正8年）の公布：これらの法律の公布により、住宅地における空地（4/10）が確保されたのみならず、マスコミが都市問題を頻繁に取り上げるようになった¹¹⁾。

③住宅博覧会：大正11年には東京府による平和記念東京博覧会文化村（上野）と、日本建築協会による住宅改造博覧会（桜ヶ丘）が開催されたが、実物展示であることから当時の人々に大きな影響を与えたと思われる。

④関東大震災：この災害により、都市問題や郊外住宅に対する認識が飛躍的に高まったと言える。

上記の点をふまえて表－1を見ると、菜園や遊び場に△が多く、当時はまだ実用庭園というものを、あまり意識して設計していなかったことがわかる。

また、当時の実用庭園についてはイギリス、ドイツだけでなくアメリカの事例（図－1）も紹介されていた¹²⁾ことを考えると、わが国の実用庭園がどの国の影響を受

表－3 京阪神地方の郊外住宅庭園の概要（大正15年）

住宅地名	坪数	家 屋	庭 園
伽羅橋園	2万	洋風バンガロー建築（1万円内外） 現在14軒、将来は20軒に	芝生を主体とした実用主義の洋風庭園で家庭によりスベリ台、ブランコ、ベンチ等がある
石橋田園	2万	洋風で内部は日本趣味（7千円位） 現在25戸、サラリーマン向け	十分な庭地はあるが、庭園の設計はない
雲雀ヶ岡	3万	洋風バンガロー式（建築費高め） 上流向き、19戸	十分な庭地を生かして造ったLandscape Garden（和洋・傾斜式）
中洲菜園		簡単な小日本式住宅、15戸（8千円位） 茶屋風の風流があり隠居所向き	数寄屋風の庭
甲陽園		日本式住宅、住宅・長屋・別荘・その他（地価：坪30-50円）	観賞本位の成金風の壮大な庭園
新坂井	2万	洋風住宅、日本住宅混在、一般向き 25戸（地価：35円内外）	建築が新しく、庭園に着手していないが、樹木を数本、植えた所が多い
千里山	14万	和洋混合、外観はほとんど洋式 中流小住宅 200軒	芝を張り、十分な面積を持つ、実用主義の庭 子供の遊び場がある
林山荘園	3千	日本式、壮大な別荘式（3千円位）現在4軒 将来は11軒に（地価：坪50-100円）	観賞本位の壮大な庭園
浜寺	4万	日本式住宅、上流向き（1万円内外）	庭師、樹木屋による観賞本位の日本式庭園
羽衣園	3万	日本式住宅 戸数10軒	松林がある
湊道園地	3万	日本式住宅 戸数7軒	松林がある
桜ヶ丘	6万	種々の洋風住宅、30軒	前庭は畳がなく植込みがある 後庭は草花の栽培が時々、見られる
香櫨園	12万	各種の和風、上中小流の住宅及び長屋200軒 長屋が多いが、住宅も50軒ある 建築中のもは一軒家の中流住宅	松林がある 入口に少し、植木の植込みがあるのみ
南浜寺		サンマーハウスを100軒建てる計画 外観が洋式の日本住宅（3千円内外）	入口に少し、植木の植込みがあるのみ

表－4 敷地面積と国民庭園の割合

第三種	第二種	第一種	敷地面積（㎡） 建築面積（㎡） 間口m（側庭） 建物 側庭（奥行m） （前庭） 建物 後庭（
六〇〇	四五〇	三〇〇	
八〇	七五	七〇	
二〇（一）	十八（一）	十五（一）	
二	二	二	
二	一	一〇	
六	五	三	
三〇（一）	二五（一）	二〇（一）	
五	四	三	
七	七	七	
一八	一四	一〇	

けていたかについては、不明な点が多い。

このころの住宅庭園の実態は表-3(角谷英三(1926):京阪神地方の郊外住宅:千葉県立高等園芸学校卒業論文の一部を表にまとめたもの)のようであったと考えられるが、住宅庭園が施主の年齢や経済力に規定されつつも、大正末期になってようやく、中流階級の庭園に実用本位のものが現れ始めたと考えられる。

(2) 第2期:昭和元(1926)年—昭和11(1936)年

この時期は、昭和4年の経済恐慌に象徴されるように全般的に不況であり、特に造園業界はその影響が深刻であったと言われているが、生活改善の理想に基づく住宅競技設計は全盛時代を迎える。

特に、大阪毎日新聞社による健康増進運動の大プレスキャンペーン(昭和4年3月—8月)や東京朝日新聞社による住宅図集等の発行¹³⁾は社会に大きな影響を及ぼしたと思われ、この流れの中で行われた大新聞社による二つの競技設計は際だった特徴を有する。それは、実用庭園の定着と、樹種の記載(図-2)や庭園に関する記述の増加である。このことから、当時、一般的に庭園に関する関心がやや高まったのではないかと推測できる。

昭和7年頃は、日本建築協会等がまとめた競技設計を行っているが、メートル法に依る小住宅設計図案を除いては△は少なく、実用庭園は定着していると考えてよいであろう。

なお、この時期にはモダニズムの影響を受けたと思われる海外の庭園、即ち「平面は極めて単純な線の組合せであり、時々斜線や三角形や円挿入¹⁴⁾」された庭園が日本の雑誌等に紹介されているが、建築の様な明確な影響は図面には見られない。これは、建築家の側にも施主の

側にも、主に経済的観点から、庭園に家屋と同等の意匠を望んでいなかったのではないかと考えられる。そして、この時期には伝統的な日本庭園を部分的に取り入れた図面が散見されるが、このことは、モダニズム運動と庭園を結び付けて考えない建築が比較的多かったのではないかと推測できる。

(3) 第3期:昭和12(1937)年—昭和17(1942)年

昭和16年までは特にめだった点はないが、昭和17年になると庭園の構成の中で菜園の占める割合が増大する。(敷地全体の面積に対する菜園の面積の割合は、朝日住宅図案1/41に対して第19回住宅懸賞設計図案1/12)¹⁵⁾

これは、昭和16年12月から日本は太平洋戦争に突入し、食料増産が国策になり、それが庭園の構成に影響したと考えられる。

また、この頃になると、国民住宅に呼応した国民庭園という菜園重視の実用庭園が造園関係者の注目を集め始める。これは、昭和16年8月には陸運統制令により、植木、庭石、盆栽、などの自動車の積み込みが禁止されたうえ、同年11月には物品税改正により、植木、庭石、盆栽、鉢植などの取引に間接税が課税される¹⁶⁾など、造園業界を取り巻く環境が厳しくなり、今まで等閑視していた中流階級の実用庭園に着目せざるを得なくなったと言える。田村剛も、「国民庭園私案」(図-3)¹⁷⁾を発表すると共に、国民庭園について表-4のような計算¹⁸⁾をしている。

4. おわりに

本研究においては中流階級を対象とした実用庭園の存在を家屋の間取りとの関係において考察したが、大正後

図-1 アメリカの住宅庭園

図-2 朝日住宅34号型

図-3 国民庭園試案(田村剛設計)¹⁷⁾

期から昭和初期にかけての主な住宅競技設計における実用庭園の構成要素は、あまり大きな変化を見せていなかった。これは、当時モデルとした欧米の実用庭園が、第一次世界大戦という経済的制約の下で発展したことから、不況から戦時下へと進む当時の日本の状況を許容するものであったと考えられる。

当時の実用庭園は、庭園のデザインという観点からは貧困であったと考えられるが、成城学園前に建てられた朝日住宅に住んだ人々の手記¹⁹⁾を読むと、子供本位の庭や、家庭菜園に対する意欲などが読み取れ、庭園のユートピアという観点からは、この時代は、庭の原点的なものを指向した時代と位置づけることも可能であろう。

なお、本研究に当たっては、千葉大学の白井彦衛教授、赤坂信講師、宮城俊作助手から貴重なアドバイスを頂きました。ここに厚く感謝の意を表します。

文献及び補注

- 1) 田村剛 (1933): 不況時に当りて造園業者に与ふ: 庭園と風景15 (1), 7
- 2) この時代において、造園家の活躍がなかったわけではなく、設計事務所では戸野琢磨、後藤健一、五十嵐孝治、役人では大屋霊城、椎原兵市らがいたが、当時の中流住宅の写真をみると、庭は更地で道路沿いに画一的な植え込みがある場合が多く、上流か上流に近い中流でなければ、造園家にとって採算にあう庭園はできなかったことがうかがえる。
- 3) 木村徳国 (1958-59): 日本近代都市独立住宅様式の成立と展開に関する史的研究: 北海道大学工学部研究報告18, 19, 20, 21, 西山卯三 (1976): 日本のすまい: 勁草書房, 等がある。
- 4) 近江栄 (1968): 近代建築史上における競技設計の史的位置について: 日本建築学会関東支部学術研究発表会梗概集39, 26, および、内田青蔵 (1986): 「住宅改良会」の活動からみた大正・昭和初期 (戦

前)における「洋風系独立住宅」の導入と成立に関する研究: 私家版, に依った。

- 5) 生活改善同盟会 (1920): 時報: 建築雑誌34 (402), 67
- 6) 田村剛 (1923): 庭園の改善: 庭園5 (1), 16-20
- 7) 菜園の位置は、特に規定していないが、勝手廻に近い方がよい、と言う点に着目して台所の近くとした。
- 8) 子供室がない場合、遊び場は△になるので、必ずしも、△が子供軽視とは言えない面がある。
- 9) 田村剛 (1925): 庭園問答: 庭園7 (2), 21
- 10) 関口英太郎 (1934): 意匠から見た新傾向の庭園: 庭園と風景60 (5), 12
- 11) 森欽之助 (1943): 「庭園」誌創刊当時を回顧して: 庭園25 (2), 29
- 12) 能瀬久一郎 (1923): 庭園の改善: 庭園5 (1), 2
- 13) 住宅改良の諸問題 (1928), 朝日住宅図案集 (1928), 同写真集 (1929), 五室以内の新住宅設計—同潤会懸賞図案集 (1932) 等がある。
- 14) 関口英太郎 (1934): 前掲, 13
- 15) $1/41$ は菜園の面積: 全敷地面積 $=1:41$ を示す。全敷地面積に対する各構成要素の割合は、一定の傾向が見られなかったので省略したが、昭和17年頃から菜園重視に収斂しつつあるように思われる。なお、数値は、簡略化のため総て小数点以下四捨五入してある。
- 16) 京都府造園協同組合 (1987): 組合百年史: 京都府造園協同組合, 158-159
- 17) 田村剛 (1943): 国民庭園私案: 庭園25 (4)
- 18) 田村剛 (1943): 敷地割と庭園: 庭園25 (7), 139
- 19) 朝日新聞社 (1930): 朝日住宅写真集: 朝日新聞社, 9, 13

なお、表-1における住宅競技設計の図面の出典は、当時出版された図面集および「建築と社会」(日本建築協会)、「住宅」(住宅改良会)等の雑誌に依った。

Summary: This paper consider the appearance of “Gardens For practical Ues”, in “the competitions about the plans for a house” during the latter half of the Taisyo Period and the former half of the Showa period, from the view point of its relationship with the arrangement of rooms in the house.

Their appearance seems to have reflected the facts as follows. That model for them in Europe and the United States developed under strict financial constriction of the World War One, so those fitted for the situations of Japan during that period, that is, the period from the great depression to World War Two.

Through that period, their style had experienced little change or development. And the financial constriction on the side of the client seems to have been the main factors of such stagnancy. But the appearance of such a kind of gardens itself shows development of new view to gardens that is different from the traditional views in Japan.